キャンプにおけるグループワークが児童の心理的側面に及ぼす影響

内 田 博 昭

Ⅰ．問題と目的

今日，学校教育現場では，校内暴力をはじめ，いじめ・不登校そして学級崩壊など，子どもたちが「生きる方向性」を見失うことにより起こる教育問題が深刻化している。それらの背景には，これまでの学歴社会における知育偏重主義教育があり，学校教育の主活動である学習に自信がもてないことが起因していると考えられる。また，現代都市文明の発達，核家族化・少子化社会の到来に伴い，子どもを取り巻く社会自体が変化してしまったことも原因として挙げられる。

すなわち，「子ども社会」においては，いわゆる「遊びの3間」と言われる「時間・空間・仲間」が極端に減少してしまい，仲間と群れて遊ぶ・身体をめいっぱい動かしながら遊び回るなど，これまで直接体験を通して自然に身につけてきた様々なことを学ぶ機会が減少してしまったのである。

そこで，そのような不足する体験を補い，子どもたちに学びや気づきを与える場を提供できる野外教育活動の重要性が今日叫ばれている。

1996年には，文部科学大臣（当時 文部大臣）の諮問機関である中央教育審議会の答申で，「これからの教育はゆとりの中で生きる力を育むことが大切である」という方針が打ち出された。

飯田は，この生きる力の原動力になるものとして，子どもたちの達成感や成功経験を挙げ，自分と仲間とのやりとりで何かをやり遂げたりすることの重要性を指摘し，そうした様々な直接体験ができる集団活動の一つとして組織キャンプを挙げている。

これまでの組織キャンプの研究では，その目的の一つである個人と自己の関係 について焦点が当てられ，心理的効果をみるために自己概念を従属変数とし，その変容から組織キャンプの教育的効果が検討され報告されている。

こうした組織キャンプは，小グループで長期に渡って生活及び活動が展開されるため，グループ内の人間関係が良好であることが成果を上げるのに重要になってくる。また様々な課題を解決する場合においても，グループ内の他の成員の援助によって達成されることも多く，更に他の成員に承認されることにより成就感も再強化されるものと考えられる。

しかし，その小グループ内の人間関係を深める手だてとなるグループワークに焦点を当てた研究はほとんど見あたらない。

そこで本研究では，2泊3日の短期キャンプにおいてグループワークという小集団を通して個人を援助する方法を導入し，キャンプで起こる様々な体験過程において子どもたちが自我関与を高められるようにした実験群とグループワークを重視しない統制群を比較することで，キャンプにおけるグループワークが児童の心理的側面にどのように影響を及ぼすのかを見ることを目的とする。

Ⅱ．方 法

被験者は，2002年8月3日(土)から5日(月)にファミリ野外教育研究所主催の無人島キャンプに参加した小学校3年生から6年生の児童28名であった。その中で，グループワークを重視した実験群（17名）と重視しない統制群（11名）を編成し，野外教育プログラムが実施された。そのキャンプの前後に自己概念（達成動機・努力主義・自信と自己受容・他者のまなざしの意識）・共感・協力意識・運動有能感（身体的有能さ・統制感・受容感）に関する質問紙調査及び3日間のソシオメトリックテストを行ない，またグループワーク場面のビデオ撮影，事後の感想文の記述が行なわれた。

Ⅲ．結果と考察

4つの従属変数の得点変化において，2要因分散分析を行なった。

1つ目の自己概念では，達成動機と他者のまなざしの意識及び自己概念総得点において群の主効果が有意であった。達成動機と他者のまなざしの意識において測定時期の主効果は有意ではなかった。達成動機において群と測定時期の交互作用が有意であった。そのことは，実験群，すなわちグループワークを重視した組織キャンプは，達成動機を上昇させることができると言える。それに対して，統制群の達成動機がなぜ下降したのかを考えてみると，灼熱の太陽の下で，与えられたプログラムを一人ひとりは一生懸命取り組んではいたが，他者との交流の深まりがなかったので，むしろ熱い環境下で作業をし続けたという不快感が生じたのではないかと推察される。総得点においては群と測定時期の交互作用が有意的傾向で

あった。努力主義・自信と自己受容については，群・測定時期の各主効果及びその交互作用は，有意な差は認められなかった。

2つ目の共感では，群の主効果が有意であった。測定時期の主効果及び群と測定時期の交互作用は，有意な差は認められなかった。

3つ目の協力意識では，群の主効果が有意であった。測定時期の主効果及び群と測定時期の交互作用は，有意な差は認められなかった。

4つ目の運動有能感では，その3因子及び総得点において群・測定時期の各主効果及びその交互作用は，有意な差は認められなかった。そのことは，「キャンプ活動は克服的スポーツであり，このキャンプでの身体活動を通して運動面において有能感が高まるであろう」との仮説と異なる結果であり，子どもたちにとっては，キャンプ活動を質問紙にある運動に置き換えて考えることができなかったことが原因ではないかと推察される。また，他者からの支援を受けて達成できたロック・クライミングも炎天下で登る順番の待ち時間が長くなってしまい，テンポ良く自然的障害を克服したという達成感は得られにくいものであったかもしれない。更に，今回のキャンプの身体活動場面では，子どもたちにとってできないということがあまりなかったことも原因として挙げられるであろう。

達成動機・他者のまなざしの意識・自己概念総得点・共感・協力意識において群の主効果が有意であったことを考えてみるにあたり，両群のそれぞれのキャンプ経験をあらためて調べてみると，統制群より実験群においてこれまで当研究所のキャンプに参加していた子が多く，そうした経験から実験群は，肯定的な自己概念をもち，他者のまなざし・存在も意識しながら，課題を達成していこうとする気持ちが強かったものと考えられる。また，キャンプ活動で大切とされる他者への思いやりや協力という概念は，よく指導者から話をするもので，これまでの活動の中で身をもって実感していたものと推察される。

Ⅳ．総合考察と今後の課題

本研究では，自己概念における達成動機において有意差が認められ，先行研究を支持するものとなった。それ以外の従属変数において顕著な変化が見られなかった原因としては，現代の子どもたちの実情，すなわち社会的要因による昔と今の遊びの形態の変化により，対人関係は浅く表面的なものとなり，深く関わることに対して不慣れであったために，グループワークに馴染めなかったことが考えられる。また2泊3日という期間は，グループの発展段階上，対立・葛藤の段階でキャンプが終了してしまったのではないかとも考えられる。更には，日常生活と無人島生活の予想外のギャップの大きさからマイナスのイメージをもってしまったことも原因の一つとして推察される。

しかし，本キャンプで特徴的な個人を見てみると，自己概念の4因子のうち，自信と自己受容得点で上昇傾向のみられた男子D・E・Pは，共感得点が10点以上も大きく上昇し，今の自分をあるがままに受け入れ自分に自信のもてる子は，他者へ共感の気持ちが高まるものと推察される。それに対して，キャンプにより共感得点の下降した5人を見てみると，それに対応して協力意識得点も下降か無変化の子たちであり，自己概念得点も同様に下降か無変化であった。すなわち，暑く不便な無人島生活において自分が生きることに精一杯の子は，他者への思いやりや共感，そして他者と協力して何かを成し遂げていこうとする協力意識は，到底もてないのであろうと推察される。

また，実験群の自己概念における達成動機得点においては，ほとんどの子が上昇し，あるいは無変化であったが，2名の男子E・Pだけは下降した。その2名は，共感得点は大きく上昇していることから，あまり周りの子に気をつかい過ぎたり，意識し過ぎてしまうと自分自身が思い切って行動できなくなってしまうのではないかと考えられる。

更に，ソシオメトリック・テストで，仲の良い2人でキャンプに参加した女子O・Pは，集団構造においては，行動として2人で最後まで孤立していたが，達成動機・共感得点で上昇という心理的変容が見られるため，キャンプ期間がもう少し長くなれば行動レベルにも表われてくるのではないかと考えられる。

こうした特徴的な個人をケースとして，今後は実験キャンプにおいて条件を更に整備し，全体的に心理的側面がより良く変容していくことを目指していきたい。

今後の課題としては，直前の参加キャンセルにも備え，また円滑に質問紙に応答できる高学年の参加者を多数確保し，組織キャンプの効果の一般化を図ることが必要であり，キャンプ場面での心理的側面を測定できるような尺度の開発も必要である。また，実験キャンプにおける条件の統制の仕方を更に改善・工夫することが期待され，共同研究者の確保も大切なこととなるであろう。